

勝者の全ての聖言の心髄の本質を集めて確定した覚りへの道の階梯

勝者の聖言 (gsung rab) 全ての本質 (gnad) を集めたもの、大乘〔の創始者である〕ナーガールジュナとアサンガという大馬車 (=大乘) 二つの伝統、一切智者の境地へと赴く最上の人〔が学ぶべき〕法の流儀、三種類の人が実践すべき〔道の〕階梯全てを残らず集めたもの、覚りへの道の階梯を通じて〔仏教を学ぶ〕幸運に恵まれている人を仏陀の境地へと導く方法、〔これらが〕本書で ('dir) 説明しようとしている法である。

それについて、〔インドの〕栄えあるヴィクラマシーラ〔寺院〕の識者たちは、(1) 法(教え)を著作する人の偉大さと、(2) 法の偉大さと、(3) それをどのように説法し聴聞するかという、その三つの条件 (tshul gsum) 〔を確認すること〕が、まず〔内容の説明に〕先だって重要なことであると主張なさったのに従って〔それを最初に説明するために〕、覚りへの道の階梯への手引き〔である本書〕に四節がある。

[A1] 法(教え)の起源が素晴らしいものであると示すために〔、その起こりである『覚りへの道を照らす灯明』の〕著者(アティシャ)の偉大さを示す。

[A2] 実践的な教え (gdams ngag・ダムガク) に対して尊敬を生じさせるために法の偉大さを示す。

[A3] その二つの偉大さを備えた法について説法と聴聞をどのようにすべきか〔を示す〕。

[A4] 実践的な教え (gdams pa・ダムパ) によって弟子をどのように導くかというその階梯。

第一 [A1] 著者〔について説明しよう〕。この実践的な教えは一般的には聖弥勒の『現観莊嚴論』の実践的な教え〔を指す〕が、特にここ〔で依拠する〕テキストは『覚りへの道を照らす灯明』であるので、その〔『覚りへの道を照らす灯明』の〕著者が、この〔実践的な教えの〕作り手でもあるのである。

その方はまた、ディーパンカラシュリーニュジャーナ大先生 (slob dpon chen po)、別名吉祥アティシャという〔名前で〕一般に広く知られている。その〔著者の〕偉大さについて三節ある。

[B1] 完璧な家柄にお生まれになったこと。

[B2] その〔生まれた〕体 (rten・抛り所) に優れた性質 (yon tan・徳) を身に付けられたこと。

[B3] 〔優れた性質を〕身に付けてから教えに対してなすべき事をなさったこと。

第一 [B1] 。〔ナクツォ〕翻訳官の『讚歎偈』に、

東方のサホールの素晴らしい国に、大きな町がある。ヴィクラマニプーラである。その中央に王の非常に大きな宮殿がある。「金の勝利幡を持つもの」と呼ばれる。資産と権力と富は中国の東方皇帝 (stong khun rgyal po) と等しい。その〔国の〕カリヤナシュリー (dge ba'i dpal) 王とお后シュリーマーリーチ (dpal mo 'od zer can) というご両親に、パドマガルバ (padma'i snying po) とチャンドラガルバ (zla ba'i snying po) とシュリーガルバ (dpal gyi snying po) と呼ばれる三人のご子息がいた。パドマガルバ王子には五人のお后がいて、ご子息は九人いた。ご長男のプニヤシュリー (bsod nams dpal) はダーナシュリーという現在の有名な大学者である。末子のシュリーガルバ (dpal gyi snying po) はヴィールヤチャンド

ラという比丘である。真ん中のチャンドラガルバは、現在の聖ラマ (bla ma rje btsun・アティシャ) である。

と書かれている通りである。

第二 [B2] 優れた性質を身に付けられた様子には二節ある。

[C1] たくさんのことを学ばれ、聖典 (lung) についての優れた性質を身に付けられた様子。

[C2] 正しく修行して覚り (rtogs) についての優れた性質を身に付けられた様子。

第一 [C1]。21歳までに非仏教と仏教とに共通の学問領域である文法学と論理学と建築学と医学という四学科を学んで学者の最高 [位] になった。特に15歳におなりになったとき、〔ダルマキールティの〕『論理の滴 (rigs tshigs・ニヤーヤビンドゥ)』を一回聴聞し〔ただけで〕、非仏教徒の論争に長けた人として有名なある人と議論をして、彼を論破なされたので、〔アティシャの〕名声はあまねく広まったと大ドルンパ (gro lung pa chen po) はおっしゃっている。

それから、黒山寺 (ri nag po'i gtsug lag khang) のヨーゲーシュヴァラ・シュリー・ヘーヴァジュラ〔尊の仏像〕を拝観なさり、ヴァジュラダーキニーに予言されたラマ・ラーフラグプタから灌頂を完璧に授かった。密教名をジュニャーナグフヤヴァジュラ (ye shes gsang ba'i rdo rje) と名付けられた。御年29歳になるまで、密教の覚りの境地 (dngos grub・悉地) を実現したたくさんの方達の御前で金剛乘 (密教) を学んだので、典籍と実践的な教え全てに精通した。

「私こそが秘密真言 (gsang sngags・密教) に精通している」というお考えが生まれたとき、ダーキニー達が、それまで見たこともないたくさんの方の真言の典籍を夢の中で示して、〔アティシャの〕お心の慢心を打ち破った。

それからラマ達は実際に〔現れ、〕本尊達は夢に〔現れて、〕出家するならば、教えとたくさんの方の衆生とに広大な利益を生むであろうと〔出家を〕勧めたことにより、〔部派仏教の〕大衆部の長老大持律者シーララクシタという、加行道の真実の一部に入った三昧を身に付けたものが導師をなさって出家をして、お名前をシュリー・ディーパンカラジュニャーナと名付けられた。

それから31歳までの間、顕教 (mtshan nyid kyi theg pa) の仏教の上下の学問 (大乘・小乗の典籍) の蔵を学んで、特に偉大なるヴァイバーシカ (毘婆沙師=説全て有部) 〔の典籍〕について〔の講義を〕、ラマ・ダルマラクシタ御前にオータンプーリにおいて12年間お聞きになった。

〔部派仏教の〕根本の四部派の典籍によく精通したので、異なった部派の、布施を受ける (byin len) 〔やり方〕などの、辞めるべきこと、やるべきことの細かい項目も、混同することなく理解なされた。

第二 [C2]。一般に勝者 (仏陀) の聖典の教え全ては、宝の如き〔経・律・論の〕三蔵に属しているので、覚りについて説かれたことも、宝の如き〔戒・定・慧の〕三学に含まれる。

そのうち、戒学 (戒律についての修行すべき項目) は、定学 (禅定についての修行項目) と慧学 (智慧のために修行すべき項目) などの全ての〔身に付けるべき〕優れた性質の拠り所であると聖言 (gsung rab) およびその意図を注釈したものに何度も賞賛されているので、まず最初に戒学の覚りという優れた性質を持つものにならなければならない。

それについて三つあるうち、最上の別解脱戒を持つものになったことについて、〔ナクツォ翻訳官の『讚歎偈』に〕

比丘の戒を受けてから、尻尾の毛に執着しているヤクが、尻尾の毛一本一本が木〔の枝〕にひっかかったとき、獵師に命を奪われると分かっても、命を賭けて尻尾の毛を切らずに護ろうとするように、護ると誓った、〔戒〕学の大項目 (bslab pa'i gzhi chen po) は言うまでもなく、〔戒〕学の細かな項目一つ一つも命を賭けて護ったので、長老大持律者になった。

と出ている。

菩薩戒を持つものになったことについて、慈と悲を根本とする菩提心を育む多数の実践的な教えと、特にセルリンパに師事して、聖弥勒からアサンガへ、また文殊からシャーンティデーヴァに伝わった実践的な教えの最上のものを長い間学んだことにより、自分よりも他者を大切にする菩提心をお心に抱かれた。その発願心 (smon pa'i sems) から引き出された発趣心 ('jug pa'i sems) 〔により〕偉大なる菩薩行を学ぼうと誓って、その通りに〔菩薩の戒〕学を学ぶ(実践する)ための正しい〔菩薩〕行によって、勝者の息子(菩薩)達の制止戒 (bcas pa'i mtshams) から外れないようになさった。

金剛乗の戒を持つものになったことについて、自らの身体を本尊〔の身体〕であるご覧になる生起次第と、金剛心〔を完成させる〕究竟次第の三昧を持つものとなることによってヨーガ行者の中心人物となり、また特に制止戒から外れないという誓いの言葉を規則通りにお護りになった。

三つの戒の戒律の学ぶべき諸〔項目〕を〔実践しようと〕勇気をもって誓うだけではなく、誓った通りに〔戒律に〕従って制止戒を外れることなく護り、百のうち、ほんの少しの〔制止戒を〕犯したとしても、早急に自分で回復修正の一連〔の作法〕 (tshogs) を清く正しく実行なされた。

定学を持つものとなったことについて二つあるうち、〔声聞乗、菩薩乗、金剛乗に〕共通〔の定学〕については、精神集中 (gzhi gnas・止) の心を〔実践する〕能力を身に付けた。また〔金剛乗に〕独自〔の定学〕については、完全に揺るぎない生起次第を持つにいたった。それについても、密教の禁止の行 (rig pa brtul zhugs kyi spyod pa) を六年あるいは三年なされた。

慧学を持つものとなったことについては、〔三乗に〕共通〔の慧学〕については、精神集中 (zhi gnas・止) と分析的瞑想 (lhag mthong・観) を結びつけて行う分析的瞑想の三昧を身に付けた。また〔金剛乗に〕独自〔の慧学〕については、究竟次第の優れた三昧を身に付けた。

[B3] 教えに対してなすべき事をなされたことについて二節ある。

[C1] インドで活動された様子。

[C2] チベット活動された様子。

第一 [C1]。〔ブッダガヤの〕金剛座〔がある〕大菩提宮で、外道の誤った主張を三度、法によって論破なされて、仏陀の教えを守り、仏教内の上下(大小乗)の教えについても、理解していないもの、誤解しているもの、迷っているものの悪い垢(欠点)を払拭して、教えを興隆なされたので、どの部派のものたちからも、区別無く頭頂の飾り〔のように貴い人〕と見なされた。

[C2] チベットで活動された様子。天〔から〕ラマ〔になった〕叔父・甥(イエシェーウーとチャ

ンチュプウー) が、ギャ・ツォンドウセンゲ (rgya brtson seng) とナクツォ・ツルティムゲルワ (nag tsho tshul khirms rgyal ba) の二人を順番にインド〔のアティシヤのもと〕に送り、繰り返し何度も〔チベットに〕お迎えするよう大変な努力をしたことにより、チャンチュプウーの代にお招きする〔ことができ〕、上ガリ (mnga' ris stod) にいらっしやった。そして、〔混乱していた〕仏陀の教えを整理してくださいと〔チャンチュプウーに〕お願いされたことにより、顕教と密教の本質を全て集約し、実践の階梯として配置したテキストである『覚りへの道を照らす灯明』をお作りになるなど〔のご業績〕によって、教えを興隆なされた。

それについても、ガリに三年、ニェタンに九年、ウ・ツァンの他のところに五年間、〔仏教を学ぶ〕幸運に恵まれている人たちに対して、顕教・密教の典籍と実践的な教えを残り無く示して、埋もれてしまっていた〔仏陀の〕教えの伝統 (srol) を新たに立て直した。また伝統が少しは残っていたところでは、より盛大なものになされた。誤解の垢によって汚された人たちを正しく払い除け、宝の如き教えを、無垢なものになされた。

牟尼 (仏陀) の真意を明らかにするテキストを著作するための完全無欠な原因が以下のように三つある。(1) 上に〔述べた〕ように知られるべき五領域の学問に精通していること、(2) それらの意味を実習する本質を教えた実践的な教えを、等正覚〔の仏陀〕から始まり、途切れなく〔続く〕聖人たち〔の間〕で伝わってきた口伝を持っていること、(3) 本尊の顔をご覧になってお言葉で〔典籍を学ぶ〕ご許可を得ていること、である。

これらのうちのいずれか一つだけでも、〔仏教の〕テキストを著作することができるが、三つとも完全に備えていたら、全く完全無欠なものとなり、この大先生には、三つ〔の原因〕が全部あるのである。

そのうち、本尊によって支えられたことについては、『賛嘆偈』の中で

吉祥ヘーヴァジュラ〔尊〕と誓言莊嚴王と勇猛なる世自在と、聖ターラ女神 (jo mo rje btsun sgrol ma) などを直接顔を拝して〔法を学ぶ〕ご許可を得たので、夢でも現でも、深淵で広大な正法を常に聴聞したのである。

とおっしゃっている通りである。

ラマ〔達〕の連なりの伝統に、〔三乗に〕共通な〔伝統〕と大乘の伝統の二つがある。そのうち、〔後者には〕波羅蜜と秘密真言の二つがある。そのうち前者には哲学 (lta ba) の伝統と行の伝統の二つがある。さらに後者には弥勒からの伝統と文殊からの伝統があり、都合〔波羅蜜乗には〕三つの伝統がある。

秘密真言にも、伝統の筋道が五つある。さらに学説の伝統と加持の伝統と様々な教説の伝統など様々な伝統を持っている。直接聴聞したラマは、『讚歎偈』に

常に師事したラマは、シャーンティパとセルリンパ、バドゥラボーディ、ジュニャーナシュリー、密教の覚りの境地を実現したもの多数と、特に〔密教については〕ナーガールジュナから一人一人〔途切れることなく〕伝わってきた深遠なる〔哲学〕と広大な〔行〕の教説があなたにあるのである。

とおっしゃっている通り、密教の覚りの境地を実現したラマ12人がいることが有名であるが、さらに他にもたくさんいるのである。五つの学問領域について〔学んだ〕学者は既に説明した。

それゆえ、この先生は、勝者（仏陀）の真意を正しく確定することができたのである。このような先生にインド、カシミール、ウッディヤーナ、ネパール、チベットに、考え及ばないほどの弟子たちがいたけれども、主要なものは、インドでは主〔アティシャ〕と御知識が等しい大学者ピトバ、ダルマーカマラティ、ウマセンゲ、クシティガルバの四人である。善知識サンワを入れて五人とする人もいる。

ガリ出身では、翻訳官リンチェンサンポ、ナクツォ翻訳官、天〔子であり〕ラマ〔である〕チャンチュプウー〔王〕、ツァン出身では、ガルゲワ ('gar dge ba) とグクックパ・ヘーツェ ('gos khug pa lhas btsas)、ロダク出身では、チャーパティチョク (chags pa khri mchog) とゲワキョン (dge ba skyong)、カム出身では、ネルジョルパチェンポ (rnal 'byor pa chen po)、グンパワ (dgon pa ba)、シェーラブドルジェ (shes rab rdo rje)、チャクダルトウンパ (phyag dar ston po)、ウ出身では、ク、ゴック、ドム (khu rngog 'brom < khu ston brtson 'grus g-yung drung, rgnog legs pa'i shes rab) の三人が現れた。

彼らの中でも、ラマ（アティシャ）自身の御事業を廣大にさせる偉大なる継承者は、ターラーによって予言されたドムトンパ・ゲルウェージュンネー ('brom ston pa rgyal ba'i 'byung gnas) である。

以上は、著者の偉大さを簡潔にまとめたもので、詳しくは大伝記などで知るべきである。

第二〔A2〕〔「法の偉大さを示す」〕について、法とはこの教説の〔根本〕テキストである『覚りへの道を照らす灯明』である。主 (jo bo・アティシャ) がお作りになったテキストはたくさんあるけれども、〔木の〕根のように全てを尽くしているものは、『道を照らす灯明』である。顕教、密教両者の本質をまとめて説いているので、所説内容が全てを尽くしており、心を陶冶する（訓練する）階梯を主要な〔内容〕としているので実践しやすく、大乘の二派の説に精通した二人のラマの実践的な教えによって飾られているので他の説よりも殊に優れたものである。

そのテキストの実践的な教えの素晴らしい点は四つある。

そのうち第一〔B1〕全ての教えが矛盾無く理解できるという素晴らしさ〔を説明しよう〕。勝者（仏陀）がおっしゃった限りのこと全てが、この〔著作〕においては、一人の人が仏陀になる階梯として理解される。それはまた、ある〔お言葉〕は道の中心的なもの、ある〔お言葉〕は道の部分を構成するもの、というようにそれぞれ〔の位置を占める〕ようになっている。

そのうち、菩薩達がお望みになっている目的・効果 (don) は、世間の利益 (don) を実現することである。〔そのときの〕教化の対象についても、三種類（声聞、独覚、菩薩）の人全てを救済する (rjes su 'dzin pa) 必要があるので、かれらの道を〔全て〕学ぶ（実習する）必要がある。なぜならば、〔声聞乗・独覚乗・菩薩乗の〕三乗の道を知ることが菩薩の望む目的を実現するための手段（方便）であると〔『現觀莊嚴論』で〕聖弥勒がおっしゃっているからである。

大乘の道に、〔他の乗と〕共通の道と〔大乘だけに〕独自の道があるうち、前者は小乗の〔三〕蔵に出ているものである。〔共通と言っても、何でも共通なのではなく、〕自分一人の平和な幸せ (zhi bde) を求めるなどの、自分だけの考えを持つような〔大乘と〕共通しないことは含まない。

さらにまた等正覚（仏陀）は欠点の一部を無くしたものであったり、優れた性質 (yon tan・徳) の一部を実現したのではなく、あらゆる種類の欠点を克復し、あらゆる種類の優れた性質を生じさせ

たことにより、他の全ての乗の〔捨てるべきもの（欠点）〕を捨て〔悟るべきことを〕悟ったという、あらゆる種類の優れた性質が大乗の道に含まれる。

それゆえ、仏陀の境地を実現する大乗の道を支えるその一部に、全ての聖言が属することになるの。なぜならば、それぞれの種類の欠点を無くすことのない、あるいは様々な種類の優れた性質を生じさせないような牟尼のお言葉は存在しないからであり、またその全ては大乗によって実現できないものはないからである。

もし、波羅蜜乗ではそうかもしれない（全ての欠点を捨て、全ての優れた性質を実現する必要がある）が、金剛乗に入るためにはそうではない、と考えるならば、〔それは正しくない。金剛乗では〕波羅蜜乗のように布施などの個別の項目全てについて学ぶ（実習する）やり方は、密教とは異なっているが、行の基礎である発菩提心と、行〔として〕六波羅蜜を学ぶという道の大まかな内容は〔波羅蜜乗と密教で〕等しいので、そのことだけは〔両者に〕共通のものである。

〔それは〕『金剛頂』の中に「命あるものたちのために、菩提心を捨ててはならない。」とあり、また、「六波羅蜜の行は決して捨ててはならない。」と説かれており、また多数の密教經典にも〔同様に〕説かれている〔からである〕。

無上瑜伽〔タントラ〕の信頼できるマンダラ〔を成就するための〕儀式〔規則〕の多くにも、〔他の乗と〕共通の戒と〔密教に〕独自の戒の二つずつを護らなければならないと説かれているものうち、前者が菩薩戒であるからである。

〔ドム〕トン・リンポチェ御前も、「全ての教えをま四角の道（全てを完全に備えた道）によって運んでいける人、我がラマ〔アティシャ〕」とおっしゃっている。この言葉はよくよく考えるべき事柄である。

第二〔B2〕全ての聖言（gsung rab）が〔この著作の中で〕実践的な教え（gdam ngag）として現れているという素晴らしさ〔を説明しよう〕。偉大な典籍はどんなものでも、実践についての本質的内容（gnad）のない、〔理論的〕説明〔をする〕法（教え）であると考え、実践の本質的内容の中心的意味〔については、〕別に口伝（man ngag）があると理解して、〔勝者の説いた〕正法（dam pa'i chos）自身の中に、説明〔の法〕と修行の法とが別々に二つあると捉えることは、無垢なる顕教經典と密教經典とその真意を注釈した論書とに対して大いなる尊敬が生まれることに対する妨げとなり、「それら〔の典籍〕は内的な意味（実践的な教え）を説かず、外的な知識体系（go rgya）のみ確定するものである」と批難の対象であると捉える行為であり、そのような行為に依って〔罪〕障を積んでいるのだと知るべきである。

したがって、解脱を望む人たちを欺かない実践的な教えの最上のもは、諸々の偉大なる典籍である。しかしながら、自身の知恵が劣っているなどの理由で、それらの典籍だけに基づいて〔それらが〕最上の実践的な教えであると確信が持てない〔こともある〕。それゆえ、正しい口伝に依ってそれら〔の典籍〕に対する確信を求めなければならないと考えて口伝を探す必要があるのであって、諸典籍は表面的なこと（phyi rgya）を確定しているだけであるので〔仏教にとって〕内実（snying po）はなく、口伝〔こそ〕が内的な（仏教に関する）意味を説いているので最高のものであると捉えてはならないのである。

大ヨーガ行者チャンチュプリンチェン御前は、……。偉大なる主（アティシャ）の弟子ゴンパリンチェンラマもまた、……。

〔ドム〕トン・リンポチェ御前が、「たくさんの法を学んだ（実践修行した）のち、法の別の〔実践修行の〕仕方を探さなければならない〔という考えが〕起こったならば、それは誤りである。」とおしゃったように、長い間、たくさんの法を学んでも、法の〔実践修行の〕仕方を全く理解せず法を〔実践修行〕したいと思ったとき、〔それを〕別のところに探さなければならない〔と考える〕もの達もまた、前に説明したように間違っているのである。

すなわち、『俱舎論』に「教師（ston pa・説くもの＝仏陀）の正法は二種類である。すなわち、聖典（lung）を本質とするものと悟り（rtogs pa）を本質とするものである。」とおっしゃっているように、〔仏説には〕聖典としての教えと悟られるべき教えという二つ〔の教え〕以外にはないが、〔そのうち〕聖典としての教えは、法の修行するやり方を確定するものでり、悟られるべき教えは、〔修行のやり方が〕確定されたときに、確定されたとおりに修行すべきものであるので、その二つ〔の教え〕は、原因・結果の関係になる。

それはたとえば、馬を走らせるとき、前もって馬に走る場所を教えて、教え終わってからそこを走らせるのと同様である。別の場所を走る場所として教えた後、走る場所を別のところに変えるならば、物笑いの種となるであろう。同様に、聴聞と思索によって〔法の内容を〕確定してから、修行するときに何か別のことを修行することがどうして適切であろうか。

同様に、『修習次第』にも・・・。

そうであるならば、この〔『覚りへの道を照らす灯明』に説かれた〕実践的な教えによって、師匠に師事する仕方から精神集中と分析的瞑想にいたるまでの、聖言と注釈書とに説かれた道の本質（gnad）全てを集約し、それら〔道の本質〕全てについて、精神集中して修習（'jog sgom）すべきことについては精神集中の修習をし、考察の修習をすきべことについては個別的に分析する般若の智慧（so sor rtog pa'i shes rab）によって考察し、実践の階梯にまとめて導くので、〔仏陀の〕聖言全てが実践的な教えとして現れていて、それらについての実践的な教えの最上のものと捉える確信が生じるのである。そして、それらを真の実践的な教えではない背後の法にすぎないと捉える誤解を残らず退けるべきである。

第三〔B3〕勝者の真意が容易に得られるという素晴らしさ〔を説明しよう〕。聖言と注釈書という偉大なる典籍は実践的な教えの最上のものであるけれども、完全に訓練してはいない初心者は、最上の口伝に依らずにそれら〔の典籍〕に向かっても、その真意を理解することはできない。また理解できるとしても、非常に長い時間がかかったり、非常に大きな困難を見ることになる。ラマ（アティシヤ）のこのような口伝に依ったならば、容易に理解することが出来るであろう。

第四〔B4〕大きな悪行も自然に消滅するという素晴らしさ〔を説明しよう〕。『妙法蓮華経』と『真実者の章』に説かれているように、仏陀のお言葉全ては、直接的な〔表現〕あるいは間接的な〔表現〕で、成仏する方法を説いていることを理解せず、あるものは成仏するための方法であり、あるものは成仏を妨げる方法であると捉えて、良い悪い、あるいは正しい正しくない、あるいは大乘小乗に分けて、菩薩はこれは学ぶ必要があるが、これは学ぶ必要がないというように、〔どれかを〕捨てるべきものであると捉えるならば、法を捨て去ることになるであろう。そして法を捨てることによって〔作られる〕業障（悪業によって作られる災い）は、微細で知りづらいものであると『方広総持経』にお説きになっている。

法を捨てたならば災いが非常に大きいということについては、『三昧王経』に・・・。

一般に法を捨てるようなことが起こるきっかけ (sgo) はたくさんあるようだけれども、上に説明したこのきっかけこそが最大であるように思うので、〔その罪を〕捨てるように努力すべきである。それについても、上に示したような確信を得ることだけで〔その罪を〕退けることができるので、悪行は自然に消滅することになる。その確信は、『真実者の章』および『妙法蓮華経』をよく参照して得るべきできあり、法を捨てる別のきっかけについては『方広総持経』に基づいて知るべきである。

第三 [A3]〔説法と聴聞の仕方〕に三節ある。

[B1] 聴聞の仕方。

[B2] 説法の仕方。

[B3] 最後に〔説法と聴聞に〕共通な義務。

第一 [B1] に三節ある。

[C1] 法を聞くことの利益を考える。

[C2] 法および法を説く人に対する尊敬を生じさせる。

[C3] 聴聞の仕方の本論。

第一 [C1]。聴聞についての『ウダーナ・ヴァルガ』に

聴聞することによって知ることができる。聴聞することによって罪から身を翻すことができる。
聴聞することによって、利益にならないことを捨てる。聴聞することによって涅槃を得る。

という四点によって、聴聞することに依って、順番に取るべきものと捨てるべきものについて知ることができ、それを知ったのち悪行から身を翻すための戒律〔によって自らを陶冶し〕、それから利益にならないことに背を向け、善なる対象に心を思いのままに留める三昧を生じ、それから無我の真実を覚る慧学（智慧による修行）によって、〔我々を〕輪廻に縛り付ける根本〔である煩惱〕を断ち切って解脱を得ることができるとおっしゃっている。

『本生譚（ジャータカ）』に・・・などと説かれているように、〔法を〕聴聞することの諸々の利益を繰り返し繰り返し考えて、心の底からの信頼 (mos pa) を生じさせる〔べきである〕。

第二 [C2]。『地藏経』に

一心に信じ敬って法を聞く〔べきで〕あり、それを批難したり軽視したりしてはならない。法を説く人に対して供養することは、仏陀と等しいという思いを〔心に〕生じる〔べきである〕。

と説かれているように、〔法を説いてくれる人は〕仏陀と等しいと見なして、〔仏陀が説法するときの〕獅子座〔を用意する〕などの敬意と、財産によって供養して、不敬の心を捨て去る〔べきである〕。また、『菩薩地』に「傲慢な心を捨て、法と法を説く人に対して軽蔑する (khyad du gsod pa) ことなく、その二つ（法と法を説く人）に対して尊敬すべきである」とおっしゃっている。また、『本生譚』にも・・・。